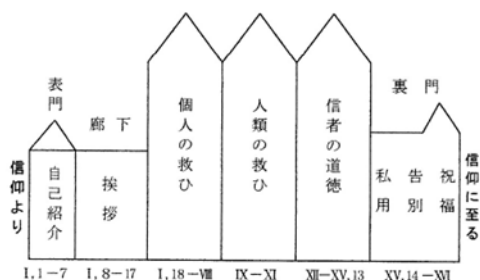


第二講 パウロの自己紹介（二） 第一章一節―七節の研究（二月二十三日）

前回の終に羅馬書の骨子について説明する所あつたが今少しく之を補ふ必要がある、羅馬書は秩序整然たる一大書翰である、勿論近代の意味における書翰とは其性質を異にし、書翰であると共に其内容に於ては一大論文である、其規模の宏大なる、其秩序の一絲亂れざる、其内容の莊麗高貴なる、洵に之を一の大建築物（大迦籃、大殿堂）に譬ふべきである、羅馬書は七千字より成る、即ち之を七千個の大理石を以て造れる一大建築物に比すべきである、羅馬書を研究するは、恰も此の一大建築物を表門より入りて裏門に出づるまで巡覽するが如きものである、全體として莊麗であると共に、其個々の室が亦莊麗にして吾人の眼を驚かすのである、今これを左の如き圖を以て表はすを便とする。

此大建築物に入る我等は其門に「義人は信仰に由て生く」なる標語の掲げられあるを見るであらう、そして我等は先づ表門の莊麗整美なるを歎稱するのである、これ第一章一節―七節の「自己紹介」であつて寔に稀に見る大文字である、表門の次ぎには廊下がある、これ一章八節―十七節の「挨拶」に相當する、之も亦表門に劣らざる立派な物である、此二つを通過して愈よ本館に入る、本館は三棟に分たる、第一の本館は三棟中最大のものであつて、本館中の本館と云ふべきものである、其莊嚴雄大は言語に絶せりと稱すべく、人間の建築物中他に類例なきを思はしむる程の物である、之一章十八節より第八章の終までに至る「個人の救ひ」の項である、次ぎは本館第二にして其美また第一に劣らぬ宏壯なる建物である、即ち九章―十一章の「人類の救ひ」が之に當るのであ



る、本館第三は十二章より十五章十三節までの「信者の道德」に當る、我等は救拯の問題の後に實踐道德に移るのである、先づ救拯あつての道德である、道德あつての救拯ではない、この第三の本館も、此世の建物とは趣を異にせる美はしきものである、以上の如く三棟の本館を巡覽し終りて遂に我等は裏門に達する、これ十五章十四節以下十六章末尾までの「私用、告別、祝福」に當る、此裏門たるや亦見過すべからざる貴きものである、かくして裏門を出で、我等は羅馬書てふ一大殿堂を見終へるのである。

而して此の大建築物は實に「信仰より信仰に至る」ものである、之を組織せる七千個の大理石は孰れも信仰の大理石である、天井を仰ぐも床に伏すも壁を見るも一として信仰に立たぬはない、土臺其ものも亦信仰より成る、空氣其者も亦信仰の香を放つ、その一見して信仰と見えざる部分も精査すれば明かに信仰の上に立つ、實に信仰

——然り主イエスキリストに對する信仰は此大迦籃に漲り溢るゝ特徴である。

我等の羅馬書を講ずるは聽者を案内して右の如き一大殿堂を巡覽するのである、もし其中の個々の石、個々の壁等について精細なる説明をなす時は容易に此巡覽を終はることが出来ない、故に己むを得ず重なる部分の説明を以て満足しなくてはならない、羅馬書の一節々々の詳細なる説明は之を註解者に譲り、我等は大體の精神、重なる場所、骨髓を成す思想の説明を以て満足しよう、遺憾ながら時は之以上を許さないものである。

先づ「表門」に當る自己紹介の部、即ち一章一節一七節の研究をし度い、この部は僅に七節より成り、原語聖書に於て九十四字（冠詞をも一字に數へて）、英譯聖書にて百二十七字（冠詞をも加算して）、邦譯聖書にては二百五十九字を算^{〔六七〕}へるのみである（現行改譯聖書にて二百八十九字一畔上註）、併し乍ら此表門は此の世に於ける最も美はしき、最も貴き、最も良き材料より造られしものである、即ち其一字々々が悉く大文字である、一語々々が悉く大問題を傳へてゐる、誠に稀有なる自己紹介である、「使徒」と云ふ事が一の大問題、「異邦人」と云ふ事が一の大問題、「福音」と云ふ事が右の二つの大問題よりも尚ほ大なる問題である、更に「其子（神の子）我等の主イエスキリスト」と云ふに至つては問題は益々大となるのである、其他尚ほ偉大なる文字と重大なる思想は相續いて生起する、羅馬書一章一節一七節は巨大なる大理石を累々積聚^{せきしゅう}して成れる比類なく壯大なる門である。

凡て大音譜、大詩篇には優秀なる序曲（*Prelude*）がある、そして此の序曲の中に全編の思想を壓搾せるを以て名作の特徴とする、其序曲の中に全篇の精神を收め得ざるは凡手である、例へば詩人テニソンの *In Memoriam*（追想歌）の如きは偉大なる詩篇として名あるものであるが、その四十四行より成る序曲は洵に珠玉を連ねしが如き逸品であつて、能く全篇の精神を代表せるものである、又我等は大作曲家の名譜に接する時、その序曲の中に全篇の精神の躍如として動きつゝあるを知るのである、使徒パウロ、彼はもとより文學者でもなく詩人でもなく又作曲家でもなかつた、其大作羅馬書の如きも之を謂ゆる文學者の傑作と見るべきものではない、しかし乍ら其主題は宇宙人生の根本問題である、其所説は深奥にして該切^{〔四〕}である、その論法は鋭峻にして徹底的である、その精神は高貴にして靈偉である、全篇を貫くものは脈々たる信仰の寶流である、進みて歇^{（五）}まざる心靈の旋律である、

漲り溢るゝ生命の躍動である、かくの如くにして羅馬書は一大傑作たらざるを得ない、而して其序曲たる初めの七節が稀代の作にして能く全篇の精神を代表せるは、益々以て此書の名作たるを裏書するものである。

何故にパウロは劈頭第一に自己紹介の擧に出づる必要があつたのであるか、それは彼と羅馬府の信者とが未見の間であつた（少數の者を除きては）からである、時は紀元五十七八年の頃であつた、彼は其第三回傳道旅行の途次ギリシヤのコリントに滞在しつゝあつた、使徒行傳廿二章二、三節に「其地を経て多くの語を以て人々を勧め、ギリシヤに至り此處に三ヶ月留りて」とあるがそれである、其時に、又其時の前から彼の心に二つの相納れぬ者が潜んで居た、一は以前より胸に秘め居たる羅馬行の希望であつて一はエルサレム行き of 責務であつた、二つを同時に行ふことはできない、孰れか一を先にしなければならぬ、勿論彼は責務を希望の後に廻す人ではなかつた、彼は先づ責務を果さんと決意した、然る後是非とも羅馬府を訪ひ、あはよくば羅馬府を飛石として西の端イスパニヤまで福音を布かんと志した、かの責任のため此希望は後廻しとなつた、しかし彼は羅馬府を——殊に其處にある或數の兄弟姉妹を——忘れ得る人ではなかつた、よし其大部分は未見の人なりとは云へ、靈に於ては十年の知己にも勝る者である、彼はアデリア海を隔てゝ遙かに羅馬大帝國の首府を懷うた、彼の心は愛を以て燃え立つた、彼は遂に一の公的書翰を認めて彼等に送らんと定めた、併し未見の兄弟姉妹への書翰である、故に彼は先づ第一に自己紹介のために數節を用ひたのである。

かくの如き意味の自己紹介である、故に羅馬の信者と自己の間に一致點を見出して之を記さねばならぬ、これ未見の友に書翰を送るに當つては當然採るべき道である、一章一節——七節は種々の大眞理を藏する外、未見の兄

弟に自己を連結せしむる技巧の點より見ても注意すべき所である、げにパウロはギリシヤのコリントよりアデリア海を超えて伊太利半島の羅馬府まで美妙くも橋を架したるかな、而して是れ技巧の生みたる技巧ではない、愛の生みたる技巧である、主にある兄弟に對する愛が彼をして知らず識らず此技巧に出でしめたのである、故に技巧そのまゝの技巧ではない、聖められたる技巧である、我等はパウロが種々の場合に表はしたる聖き技巧、愛の技巧を、貴むものである——ただの技巧に對しては蔑視の眼を投ぐれども。

此事は一節より七節までの思想の動きを逐へば明かである、第一節を原語聖書に於て見れば先づ「パウロ」と己の名を記し、次ぎに「イエスキリストの僕」と記し、次ぎに「召されたる使徒」と記し、次ぎに「神の福音のために選ばれたる」の句を以て「使徒」なる語を形容してゐる、彼は一節に於ては専ら己の何なるかを述べて、先づ此書翰の發送者の性質如何を説明したのである。

第一節の最後の語（原語聖書にて）は「神の福音」である、パウロは第二節に入りて此の福音の何なるかを述べる、即ち「此福音は従前より其（神の）預言者たちに託りて聖書に誓ひ給へるもの」なる事を示して居る、そして三節前半に於て此福音が「其（神の）子我等の主イエスキリスト」に係はるものなる事を述べる、然らば此キリストとは何であるかとの疑問が起る、乃ち三節後半と四節は之に對する答にして「彼は肉體によればダビデの裔より生れ、聖善の靈性に由れば甦りし事によりて明かに神の子たること顯はれたり」と彼は兩方面より説明してゐる。

かくイエスの事を説明せしパウロは次に彼と自分等との關係を述べて第五節を作つた、即ち曰ふ「我等彼より

恩恵と使徒の職を受く、之其名のために萬國の人々をして信仰の道に従はせんとなり」と、萬國の人々とあるは凡ての異邦人の意味である、そして此「凡ての異邦人」なる語より羅馬府の信者に言ひ及んで（彼等も亦異邦人の一部なれば）六節を作り「汝等も亦其人々（異邦人）の中にありて召を蒙りし者なり」と記し、以て此書翰の受信者の性質を明らかにしてある、この如くして自己より出發して愈々羅馬の兄弟にまで筆を運び來りて彼は第七節の語を發し得るに至つたのである、七節前半には「我れ凡て 로마 に在る所の神に愛しまれ召を蒙り聖徒と成れる者にまで書を贈る」とある、茲に彼は其心の手を遙か羅馬府に伸ばして其處の兄弟と握手したのである、もし第一節より茲までを一言にして云へば「パウロ、羅馬の聖徒にまで書を贈る」である、實は斯く簡單に記しただけでも事は辨ずるのであつた、其好き例は使徒行傳二十三章二十六節の「クラウデアルシアス、最も尊き方伯ペリクスの安きを問ふ」である、しかしパウロは羅馬の聖徒と一致點を見出すべく、愛の技巧を以て右の如き異常の迂回路を辿つたのである。

劈頭第一に「パウロ」と己の名を記して後彼の筆は一語又一語次第に遠く脇路に入るが如く見えた、彼は何處まで外れて行くのであるかと讀者は大いに危む、然るに彼は鮮やかなる手練を以て六節より七節前半に及びて遂に受信者と握手して了つた、されば彼は最後に於て祝福の辭を述べてこの異常なる自己紹介を終つた、「汝等願くは我等の父なる神及び主イエスキリストより恩恵と平康とを受けよ」と七節後半に在る。

この偉大なる「自己紹介」について英の聖書學者ジェー・エー・ビートの述べし左の語は誠に美はしき説明であると思ふ。

パウロの初めの語（一節より七節迄を指す）の莊美と整齊に注意せよ、それはタルソの猶太人（パウロを指す）とロマの信者との間の深き谷に架けた水晶の弓形橋である、パウロは先づ己の名を記し、次ぎに己の職の權威を述べ、次ぎに其宣傳する福音に言及する、福音の一語より進んで彼は福音の大なる主問題たる「ダビデの子にして神の子たるキリスト」にまで上る、これ此弓形橋の嶺である、茲より彼は再び使徒職について一言し、其使徒職の働きの範圍たる異邦萬民に言及する、そして遂にこの異邦萬民の中に在羅馬府の信者を見出すのである、彼は自己の權能主張を以て始め彼らの權能を認めて終つた、深き谷に橋が架かつた、民族的差別の河を超えて彼は一の弓形橋を投げた、それを形造る一つ一つの部分は生ける眞理であつて、其要石（中央の石）は人と成りし所の神の子である（第四章を指す）、此橋を渡して、彼は彼の父にして彼等の父なる神、及び彼の主にして彼等の主なるキリストよりの祝福を送つた（ビート羅馬書註解三十八頁）
洵に美はしき且最も適切な説明である。

さて此弓形橋の第一部は「イエスキリストの僕パウロ」である、之を原語の順序によれば

パウロ 僕 イエスキリストの

となる、「パウロ」と第一に己の名を記し、次ぎに「僕」と記し、次ぎに誰人の僕なるかを示すために「イエスキリストの」と記したのである、かく原語の順序を逐ふ時この語を發した時のパウロの思想の動きが知れるのである。

「僕」と譯されし原語は δούλος（ドゥーロス）であつて奴隸を意味する、されば有名なるモフワット氏の改

訳聖書は之を slave(奴隸)と訳してゐる、パウロは自己を以てイエスキリストの奴隸となしたのである、之大に注意すべきことである、世にはイエスの弟子と自稱する人、イエスの兄弟と自稱する人、イエスの友と自稱する人がある、勿論我らは彼の弟子である、兄弟である、又友である、そこに何らの誤謬はない、併し問題は其上に更にイエスの奴隷と云ふ觀念を附加するかせぬかに存する、此語を以て我等は彼に對する絶対的服従を意味するのである、もし此第四の語を除きて單に彼の弟子ならんか、單に兄弟ならんか、單に友ならんか、勿論我等は彼に全然的服従をしないのである、弟子は全然師に服従する者ではない、師に背くことも師を棄つることも出来る、師の思想を舊しとして批評することも出来る、世にイエスの一部を取りて他を棄つる者多きは是れ彼の弟子たるものにして、彼に身を任せたる僕ではない、又イエスの友と云ふに止まらば或時は彼の言に従ひ或時は彼の言を斥け、又我より彼に忠告を呈することも出来る、勿論彼を批評に上すことも出来る、世に彼の友たるに止まる者甚だ多い、又イエスの兄弟を以てのみ居る者も右と大同小異である、到底全部を獻げて彼に従へる者ではあり得ない、

我等はイエスの弟子でもあらう、兄弟でもあらう、友でもあらう、しかし何よりも第一に彼の奴隷でなくてはならぬ、これ必須なる第一要件である、奴隷と云へば主人に全然服従すべきものである、水に入ると言はるれば水に入り、火に入ると言はるれば火に入り、死せよと言はるれば死す、主の命維れ服ひ、主のために死するを以て己の名譽、特權、幸福とする、實に基督者はキリストに對して此種の關係に於てあらねばならぬ、洵に日々十字架を負ふて彼に従ふ決心ある者にして初めて基督者たり得る、彼の一部に服して他に服せず、彼の命に半ば服

して半ば服せず、彼の命を或時は守りて或時は守らず、これ己を主として彼を己の従たらしめんとするものであつて、己を空しうして彼に事^{つか}へんとする者ではない、此種の人は或はキリストの弟子であり友であり兄弟であらう、けれどもキリストの僕ではない、そしてキリストの僕たらぬ者は少くともパウロの眼に於ては基督者ではないのである、我等は自己の有形物無形の所有全部——その生命までも——彼に献ぐる心ありて初めて基督者たるのである。

パウロは誰人にも頭を屈せぬ人であつた、その事は彼の全生涯と全書翰とが證明して居る、人に對して、殊に我を抑へんとする者に對しては、彼は極端に強剛であつた、この不屈の氣性は彼の言動の隨時隨所に發露して彼の姿をして峻峭^{しゅんしやう}ならしめて居る、然るにこのパウロがキリストに對してのみは絶對的服從の道を選んだのである、實に彼にとつては人の奴隸たるは死を以ても償ひ難き最大の耻辱であつた、「そは我誇る所を人に虚くせられんよりは寧ろ死ぬるは我に善き事なればなり」(コリント前書九の十五)とは彼の素懷^{そくわい}であつた、然し乍らキリストの奴隸たるは何物を以ても換ひ難き最大の榮譽であつた、彼はかの耻辱の道を取らずして此榮譽の道を取つた、我等また彼に倣^{なま}ふべきである、人の奴隸には決してなるまじ、如何なることあるとも——よし死を以て脅かさるゝとも——決して成るまじ、併し神^{かみ}の獨子^{ひとりご}、人類の救主^{きうしゅ}、我等の主たるイエスキリストには全然奴隸の位置に立たんと、これ我等の悔改當時の決心であらねばならぬ、又一生涯の決心であらねばならぬ。

然らば我等キリストの奴隸となる時われ等の尊重する自由を喪失する虞^{おそ}れなきか、否、我等キリストの奴隸となりて初めて自由を我物となし得るのである、人の奴隸となるは自由を喪失する所以である、キリストの奴隸と

なるは自由を確保し、培養し、之を眞に我の永久的所有物たらしむる道である、今人が眞の自由を有せざるは自由を獲るの道を知らざるためである、吾人はキリストの奴隷となりてのみ眞に自由を我物となし得る、然るに今人は彼の奴隷たるを好まずして、徒らに自主たらんと欲して却て何か他の人又は他の物の奴隷となるの已むなきに至り、以て獲んとする自由を却て我とみづから追ひやつて居る、キリストには絶対の服従、人よりは絶対の自由、之が眞の基督者の雜りなき姿である。

「イエスキリストの僕パウロ」と、即ちイエスキリストの奴隷パウロと、かく用ひられて奴隷なる文字も卑き意味を傳へざる高貴なる語となる、其中にパウロの信仰の特徴が美はしく表はれて居る、而して人の眞に生くる道を傳へてゐる。

一個の石塊に知り盡し難き秘密あり、パウロの一語に無限の意味あり、我等先づ羅馬書劈頭の一語に深き注意を拂ふべきである。

〔以上、 2 ・ 10〕

第二講 パウロの自己紹介（一） 現代語訳

前回、ローマ書の本質について説明したが、もう少し補足する必要がある。ローマ書は秩序整然とした一大書簡である。もちろん、近代の意味での書簡とは性質が異なり、書簡でありながらその内容は一大論文である。その規模の壮大さ、秩序の一糸乱れなさ、内容の荘厳で高貴な様は、まさに大建築物（大きな伽藍、大殿堂）にたとえるべきである。ローマ書は七千字から成り、七千個の大理石で造られた一大建築物と比べられる。ローマ書を研究することは、あたかもこの一大建築物を表門から裏門まで見て回るようなものである。全体として荘厳であると同時に、個々の部屋もまた荘厳で我々の目を驚かせる。今これを以下の図で示すと便利である。

（図省略）

この大建築物に入る我々は、その門に「義人は信仰によつて生きる」という標語が掲げられているのを見るであらう。そして我々はまず表門の荘厳で整然とした美しさを称賛する。これこそが第一章一節―七節の「自己紹介」であり、実に稀に見る大文字である。表門の次には廊下があり、これは一章八節―十七節の「挨拶」に相当する。これもまた表門に劣らず立派なものである。この二つを通過して、いよいよ本館に入る。本館は三棟に分かれている。第一の本館は三棟の中で最大であり、本館中の本館というべきものである。その荘厳で雄大な様は言葉に言い尽くせないほどで、人間の建築物で他に類を見ないと思わせるほどのものである。これこそが一章十八節から第八章の終わりまでに至る「個人の救い」の項である。次に本館第二は、その美しさもまた第一に劣ら

ない壮大な建物である。すなわち九章―十一章の「人類の救い」がこれに当たる。本館第三は十二章から十五章十三節までの「信者の道徳」に当たる。我々は救いの問題の後に実践道徳へと移るのである。まず救いがある。道徳であり、道徳があつての救いではない。この第三の本館も、この世の建物とは趣を異にした美しいものである。以上のように三棟の本館を巡覧し終え、ついに我々は裏門に達する。これは十五章十四節以下十六章末尾までの「私用、告別、祝福」に当たる。この裏門もまた見過ごすことのできない貴重なものである。こうして裏門を出て、我々はローマ書という一大殿堂を見終えるのである。

そしてこの大建築物は実に「信仰から信仰に至る」ものである。これを組織する七千個の大理石は、いずれも信仰の大理石である。天井を見上げても、床を見ても、壁を見ても、一つとして信仰の上に立たないものはない。土台そのものもまた信仰から成る。空気そのものもまた信仰の香りを放つ。一見して信仰と見えない部分も、精査すれば明らかに信仰の上に立つ。実に信仰、―そう、主イエス・キリストに対する信仰は、この大伽藍に満ち溢れる特徴である。

我々がローマ書を講義するのは、聴者を案内して右のような一大殿堂を見て回るためである。もしその中の個々の石、個々の壁などについて詳細な説明をすると、容易にこの巡覧を終えることができない。したがって、やむを得ず主要な部分の説明をもって満足しなくてはならない。ローマ書の一節一節の詳細な説明は注釈者に任せ、我々は大体の精神、主要な場所、骨子を成す思想の説明をもって満足しよう。残念ながら、時間はこれ以上を許さないのである。

まず「表門」に当たる自己紹介の部、すなわち一章一節―七節の研究をしたい。この部はわずか七節から成り、原語の聖書では九十四字（冠詞も一字として数えて）、英語訳聖書では百二十七字（冠詞も加えて）、日本語訳聖書では二百五十九字を数えるのみである（現行の改訳聖書では二百八十九字―畔上注）。しかしながら、この表門はこの世における最も美しい、最も貴重な、最も良い材料から造られたものである。すなわち、その一字一字がすべて大文字であり、一語一語がすべて大問題を伝えていく。まことに稀有な自己紹介である。「使徒」ということが一つの大問題、「異邦人」ということが一つの大問題、「福音」ということが右の二つの大問題よりもさらに大きな問題である。さらに「その子（神の子）我々の主イエス・キリスト」に至っては、問題はますます大きくなるのである。その他にも、偉大な文字と重大な思想が続いて生じる。ローマ書一章一節―七節は、巨大な大理石を積み重ねて成る、比類なく壮大な門である。

すべての偉大な楽曲、偉大な詩篇には、優れた序曲（*Prelude*）がある。そしてこの序曲の中に全編の思想が凝縮されていることが、名作の特徴である。その序曲の中に全編の精神を収めることができないものは凡庸である。例えば、詩人テニソンの「*In Memoriam*」（追想歌）は偉大な詩篇として名高いものであるが、その四十四行から成る序曲は、まさに珠玉を連ねたような逸品であって、見事に全編の精神を代表している。また、我々は偉大な作曲家の名曲に接するとき、その序曲の中に全編の精神が躍動しているのを知るのである。使徒パウロ、彼はもちろん文学者でも詩人でも作曲家でもなかった。その大作であるローマ書も、いわゆる文学者の傑作と見るべきものではない。しかしながら、その主題は宇宙と人生の根本問題である。その所説は深遠で的確である。その

論法は鋭敏で徹底的である。その精神は高貴で靈的である。全編を貫くものは、脈々と流れる信仰の宝の水の流れである。進んで止むことのない魂の旋律である。満ち溢れる生命の躍動である。このようにしてローマ書は大傑作とならざるを得ない。そしてその序曲たる最初の七節が稀代の作であり、見事に全編の精神を代表していることは、ますますこの書が名作であることを裏付けるものである。

なぜパウロは冒頭に自己紹介をする必要があったのか。それは彼とローマの信者がまだ会ったことがなかった（少数の者を除いては）からである。時は紀元五十七年か五十八年頃であった。彼はその第三回伝道旅行の途中で、ギリシアのコリントに滞在していた。使徒行伝二十章二、三節に「その地方を通り、多くのことばをもって弟子たちを励まし、ギリシアに来て、そこで三か月過ぎた」とあるのがそれである。その時に、またその時より前から、彼の心には二つの相容れないものが潜んでいた。一つは以前から胸に秘めていたローマ行きの希望であり、もう一つはエルサレム行きの責務であった。二つを同時に行うことはできない。どちらかを先にしなければならぬ。もちろん、彼は責務を希望の後に回すような人ではなかった。彼はまず責務を果たそうと決意した。その後、なんとしてもローマを訪れ、できればローマを踏み台として西の果てのイスパニヤまで福音を伝えようと志した。その責任のために、この希望は後回しとなった。しかし彼はローマを―特にそこにいる何人かの兄弟姉妹を―忘れることができる人ではなかった。たとえその大部分はまだ会ったことのない人であっても、霊においては十年の知己に勝る者である。彼はアドリア海を隔ててはるかにローマ大帝国の首都を思った。彼の心は愛をもって燃え立った。彼はついに一つの公的な書簡を書いて彼らに送ろうと決めた。しかし、まだ会ったことの

ない兄弟姉妹への書簡である。ゆえに彼はまず第一に自己紹介のために数節を用いたのである。

このような意味での自己紹介である。したがって、ローマの信者と自己との間に一致点を見出してこれを記さなければならぬ。これは、まだ会ったことのない友に書簡を送るに当たっては当然とるべき道である。一章一節―七節は、様々な大いなる真理を内包するほか、まだ会ったことのない兄弟に自己を連結させる技巧の点からも注意すべき箇所である。ああ、パウロはギリシアのコリントからアドリア海を超えて、イタリア半島のローマまで見事に橋を架けたではないか。そしてこれは技巧が生み出した技巧ではない。愛が生み出した技巧である。主にある兄弟に対する愛が、彼に知らず知らずのうちにこの技巧を使わせたのである。ゆえに、技巧そのものの技巧ではない。聖められた技巧である。我々はパウロが様々な場合に表した聖なる技巧、愛の技巧を尊ぶものである―ただの技巧に対しては軽蔑の眼差しを投げかけるけれども。

このことは、一節から七節までの思想の動きを追えば明らかである。第一節を原語の聖書で見れば、まず「パウロ」と自分の名を記し、次に「イエス・キリストの僕」と記し、次に「召されたる使徒」と記し、次に「神の福音のために選び分けられたる」の句をもつて「使徒」という語を形容している。彼は一節においてはもっぱら自分が何者であるかを述べて、まずこの書簡の差出人の性質を説明したのである。

第一節の最後の語（原語の聖書で）は「神の福音」である。パウロは第二節に入って、この福音がいかなるものであるかを述べる。すなわち「この福音は、その（神の）預言者たちによって聖書の中に、以前から約束されていたもの」であることを示している。そして三節の前半で、この福音は「その（神の）子、我々の主イエス・

キリスト」に関わるものであることを述べる。では、このキリストとは何者かという疑問が起こる。そこで三節後半と四節は、これに対する答えである。「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方」と、彼は両方面から説明している。

このようにイエスのことを説明したパウロは、次に彼と自分たちとの関係を述べて第五節を作った。すなわち言う。「この方によって私たちは恵みと使徒の務めを受けました。御名のために、すべての異邦人の中に信仰の従順をもたらすためです」と。あらゆる国の人々とは、すべての異邦人の意味である。そしてこの「すべての異邦人」という語からローマの信者に話が及び（彼らもまた異邦人の一部であるから）、第六節を作り「その異邦人たちの中にあつて、あなたがたも召されてイエス・キリストのものとなりました」と記し、これによってこの書簡の受取人の性質を明らかにしている。このようにして自分自身から出発して、ついにローマの兄弟にまで筆を進めてきて、彼は第七節の言葉を発することができると至ったのである。七節前半には「ローマにいるすべての、神に愛され、召された聖徒たちへ」とある。ここに彼は心の温かさをもって遙かローマに手を伸ばし、その兄弟と握手したのである。もし第一節からここまでを一言で言うなら、「パウロ、ローマの聖徒に手紙を送る」である。実は、このように簡単に記しただけでも事は足りた。その良い例は、使徒行伝二十三章二十六節の「クラウディウス・リシア、謹んで総督フェリクス閣下にごあいさつ申し上げます」である。しかしパウロはローマの聖徒と一致点を見出すために、愛の技巧をもって右のような異常な遠回りの道筋をたどったのである。

冒頭に「パウロ」と自分の名を記した後、彼の筆は一語また一語と次第に遠く脇道に入るかのように見えた。

読者は、彼はどこまで外れていくのかと大いに危ぶむ。しかし彼は見事な手腕をもって、第六節から第七節前半に至り、ついに受取人と握手してしまった。したがって、彼は最後に祝福の言葉を述べて、この異常な自己紹介を終えた。「私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたにがありますように」と第七節後半にある。

この偉大な「自己紹介」について、英国の聖書学者ジェー・エー・ビートが述べた以下の言葉は、まことに美しい説明であると思う。

パウロの最初の言葉（二節から七節までを指す）の荘厳さと整然さに注意せよ。それはタルソのユダヤ人（パウロを指す）とローマの信者との間の深い谷に架けられた水晶のアーチ橋である。パウロはまず自分の名を記し、次に自分の職の権威を述べ、次に自分が伝える福音に言及する。福音の一語から進んで、彼は福音の大きな主問題である「ダビデの子にして神の子であるキリスト」にまで上る。これがこのアーチ橋の頂上である。ここから彼は再び使徒の職について一言し、その使徒の職の働きが及ぶ範囲である異邦のあらゆる民に言及する。そしてついに、この異邦のあらゆる民の中にローマにいる信者を見出すのである。彼は自分の権能を主張することから始め、彼らの権能を認めることで終えた。深い谷に橋が架かった。民族的差別の川を超えて、彼は一つのアーチ橋を投げた。それを形作る一つ一つの部分は生きた真理であって、その要石（中央の石）は人となられた神の子である（第四節を指す）。この橋を渡して、彼は彼の父にして彼らの父である神、および彼の主にして彼らの主であるキリストからの祝福を送った（ビートローマ書注釈三十八頁）。

まことに美しく、かつ最も適切な説明である。

さて、このアーチ橋の第一部は「イエス・キリストの僕パウロ」である。これを原語の順序によれば、

パウロ 僕 イエス・キリストの

となる。「パウロ」と最初に自分の名を記し、次に「僕」と記し、次に誰の僕であるかを示すために「イエス・キリストの」と記したのである。このように原語の順序を追うとき、この言葉を発した時のパウロの思想の動きがわかるのである。

「僕」と訳された原語は「*δοῦλος* (ドウロス)」であつて、奴隷を意味する。したがって、有名なモファット氏の改訳聖書はこれを *slave* (奴隷) と訳している。パウロは自分をイエス・キリストの奴隷としたのである。これは大いに注意すべきことである。世にはイエスの弟子と自称する人、イエスの兄弟と自称する人、イエスの友と自称する人がいる。もちろん、我々は彼の弟子であり、兄弟であり、また友である。そこに何の間違ひもない。しかし問題は、その上にさらにイエスの奴隷という觀念を付け加えるかどうかに存在する。この言葉をもって我々には彼に対する絶対的な服従を意味するのである。もしこの第四の言葉を除いて、単に彼の弟子であろうか、単に兄弟であろうか、単に友であろうか、もちろん我々は彼に絶対に服従はしないのである。弟子は完全に師に服従する者ではない。師に背くことも、師を捨てることもできる。師の思想を古いとして批評することもできる。世にイエスの一部を取り、他を捨てる者が多いのは、彼が弟子であつて、彼に身を任せた僕ではないからである。また、イエスの友にとどまるなら、ある時は彼の言葉に従ひ、ある時は彼の言葉を退け、また我々

から彼に忠告することもでき、もちろん彼を批判の対象とすることもできる。世に彼の友にとどまる者が非常に多い。また、イエスの兄弟であることのみに留まる者も右と大同小異である。到底すべてを捧げて彼に従う者ではあり得ない。

我々はイエスの弟子でもあろう、兄弟でもあろう、友でもあろう。しかし何よりも第一に彼の奴隷でなければならない。これが必須の第一要件である。奴隷と言えば、主人に完全に服従すべきものである。水に入れと言われれば水に入り、火に入れと言われれば火に入り、死ねと言われれば死ぬ。主の命令に従い、主のために死ぬことを自分の名譽、特權、幸福とする。実にキリスト者はキリストに対してこの種の様でなければならぬ。まことに日々十字架を負って彼に従う決心がある者であって、初めてキリスト者たり得る。彼の一部に服従して他には服従せず、彼の命令に半分だけ服従して半分は服従せず、彼の命令をある時は守りある時は守らない。これは、自分を主人とし、彼を自分の従属者としようとするものであって、自分を空しくして彼に仕えようとする者ではない。この種の人々は、もしかしたらキリストの弟子であり、友であり、兄弟であらう。けれどもキリストの僕ではない。そしてキリストの僕でない者は、少なくともパウロの目から見ればキリスト者ではないのである。我々は、自分の有形物、無形の所有物すべて―その命までも―彼に捧げる心があつて初めてキリスト者たり得るのである。

パウロは誰にも頭を下げない人であつた。そのことは彼の全生涯と全書簡が証明している。人に対して、特に自分を抑えつけようとする者に対しては、彼は極めて強固であつた。この不屈の気性は彼の言動のいつでもどこ

でも表れて、彼の姿を厳格なものにしている。しかし、このパウロがキリストに対してのみは絶対的な服従の道を選んだのである。実に彼にとっては、人の奴隷となることは死をもつても償い難い最大の恥辱であった。「私は権利を用いたくて、このように書いているのでもありません。それを用いるよりは死んだほうがましです。私の誇りは空しいものにすることは、だれにもできません」(コリント第一九章一五節)とは彼の本心であった。しかしながら、キリストの奴隷となることは、何物にも換え難い最大の榮譽であった。彼はあの恥辱の道を選ばず、この榮譽の道を選んだ。我々もまた彼に倣うべきである。人の奴隷には決してなるまい、どのようなことがあっても―たとえ死で脅かされても―決してなるまい。しかし、神の独り子、人類の救い主、我々の主であるイエス・キリストには、完全に奴隷の位置に立とうと、これが我々の回心当時の決心でなければならぬ。また、一生涯の決心でなければならない。

では、我々がキリストの奴隷となる時、我々が尊重する自由を失う恐れはないのか。いや、我々がキリストの奴隷となつて初めて自由を自分のものにするのできるのである。人の奴隷となることは自由を失う所以である。キリストの奴隷となることは、自由を確保し、育み、これを真に我々の永久的な所有物とする道である。今、人々が真の自由を持つていないのは、自由を得る道を知らないためである。我々はキリストの奴隷となつてのみ、真に自由を自分のものにすることができる。しかし、今の人々は彼の奴隷となることを好まず、いたずらに自主的であろうと欲して、かえつて何か他の人、あるいは他の物の奴隷となることを余儀なくされ、得ようとする自由をかえつて自ら追い払っている。キリストには絶対の服従、人からは絶対の自由、これが真のキリスト者の混

じりけのない姿である。

「イエス・キリストの僕パウロ」、すなわちイエス・キリストの奴隷パウロと、このように用いられて、奴隷という文字も卑しい意味を伝えることのない高貴な言葉となる。その中にパウロの信仰の特徴が美しく表れている。そして人の真に生きる道を伝えている。

一つの石の塊にも知り尽くし難い秘密がある。パウロの一語には無限の意味がある。我々はまずローマ書の冒頭の一語に深く注意を払うべきである。

〔以上、
2・10〕